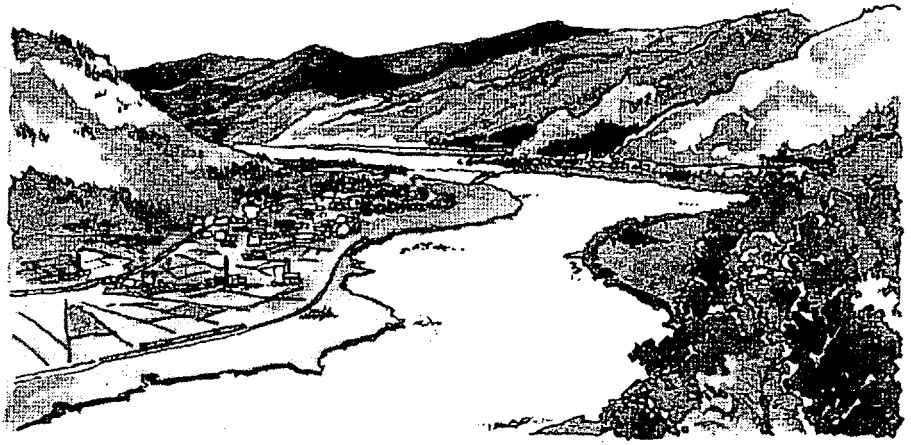

［自伝小説］

わが道を求めて（第三回）

人間をはぐくんでくれるもの

長崎　明

さしえ　竹内秀明

困ったことになりました。

この自伝小説は第三回を迎え、ようやく越後の長崎姓、村松の長崎姓について語ることになるのですが、小説のスタイルを少し変えなければ、と考えています。というのは、にいがた県民教育研究所の皆さんが実名のままで登場するのに対して、氏名権に触れるおそれがあるとのアピールがあったのです。私の家族の中からも、いかに自伝小説とはいえ、完全なフィクションでない限り、家族が実名で出るのはあまり好ましくないとの異論が出されました。確かに、実在する人物の氏名はその人の固有のものだから、肖像権と同じように、プライバシーに属することを知

らなかったわけではないが、いな、あるていど承知していたからこそ、研究所の皆さんとの対談という形をとり、その中でアップ・ツー・デイトの社会的話題や県民教育研究所の時折の報告なども混じえながら、いかにも作り話との体裁を探ろうとしたのですが…。そして、こういうスタイルの自伝小説も案外おもしろそうだと独り合点していたのですが…。

そこで、研究所の皆さんとの対話形式はこれまでどおりとしながらも、お名前はすべて仮名（かめい）とすることにします。しかし、家族の方は、自伝小説である以上、実名やむなしと納得して貰う以外にありません。また、両親や兄弟から聞いた話、提供された資料についても、場合によっては私自身のものであるかのように書くことがあるのも諒解してください。

ついでに、もう一つ注記させていただきます。前回、弟真人の資料に出て来る執権高時の時代の内管領と、将軍義満が確立した管領制との間に、何らかの関連性があるかのごとく書いたが（私の想像が当たっているかどうか誰方か教えてほしい」と付加えてはおいたのだが）、執権と将軍とでは格が違うから、内管領と管領とは名称が似ていたにしても、やはり格（役割の質、内容、社会的地位）が違う、と教えてくださった方がいる。誠に有難いことである。それだけ多くの人に読んでいただいている証（あかし）であろうか。

越後の長崎氏

○竹中

今から六五〇年も昔の長崎氏のことは良く分かりました。それがどうして越後、新潟の長崎氏に受け継がれるのでしょうか。

○長崎

そうなんですね。そこがなかなかはっきりしないのです。

そこで、まず地域と姓との関係を調べてみることにしました。ある地域に、ある姓が集中しておれば、そこがその姓の発祥地か、もしくはそれに近いと想定したのです。

例えば、及川姓は岩手県に多い。手元にある農業土木学会員名簿を見ると、全国の及川姓一九名の中九名が岩手県に関係がある。それに対して、本間姓は全国一九名中一一名が新潟県にかたよっている。及川、本間はそれぞれの県での由緒ある姓とされている。わが長崎姓はと見ると五名中二名が新潟県と

なっているが、これでは事例が少なすぎて傾向がつかめません。

○竹中

それじゃあ、新潟県はあまり長崎姓にご縁がない、ということになりそうですね。がっかりなさったんじゃないですか。

○長崎

私は三〇年ほど前に岩手大学から新潟大学に転任して来ましてね。そのとき、わがふるさと新潟には長崎姓が多勢いるかと楽しみにしていたが、当時、新潟市の電話帳では私の家のほかに四、五軒にすぎなかった。第一、私の本籍地、村松町にも私の家のほかに二、三軒しかない。

少しがっかりしたが、そのうち面白いことに気が付いた。新潟日報の県内高校合格者氏名を見ていたら、高田、直江津方面に長崎姓がわりと多い。わが家のお先祖さまは高田藩から移ってきたのかも知れない、と思ったものでした。

○矢部

多分、そうだろうね。ところで、地名と姓との間にはいくらか相関があるようだから、県内の長崎という場所を探して見たらどうかね。

○長崎

ええ、私も転勤後すぐに新潟県の地図を買ってきて調べて見たんです。観光案内半分の市販の地図（縮尺三〇万分の一）をざっと見たていどだけど、果たせるかな、四カ所見付かった。弥彦村、柏崎市、塩沢町と直江津市近く中頸城郡大潟町にあったんですね。その後調べて見たら柏崎市には長崎新田という所もある。

他の都府県にどれくらいあるか、丹念に比較しないと、本県に多いとも少いともいえないが、新潟に転任してきたばかりの頃に、長崎という地名を見付けてほっとしたものでした。

○矢部

姓氏大辞典というのを見ると、全国的なことが分かるよ。

○長崎

それも調べて見ました。

長崎という地名は、伊豆（静岡県四方郡韮山町）、武蔵（東京都豊島区）、下総、陸前、羽前、越前、越後、肥前、肥後に分布している、とある。肥前（長崎県）の長崎は、やはり鎌倉滅亡のとき、長崎一族の為基というのがこの地に逃がれて、ここを領

有したのに始まるらしい。その後、この長崎氏は大村、有馬、松浦、島津の諸藩に仕えて幕末に至っている。

伊豆の韮山は北条氏発祥の地として知られ、その北条氏に仕えた長崎一族は、新田義貞の鎌倉攻略の折り、最後まで奮戦して主家と運命を共にしている。

越後（南魚沼郡塩沢町）の長崎（旧長崎村）の由来はつまびらかでないが、これについて弟真人は次のように推測している。

鎌倉時代、越後国の守護を勤めたのは北条義時はじめ北条一族であった。とすれば、北条の執事であった長崎氏の流れを汲む者が、その当時からここに住み付いたのではないか。

あるいは、村松藩主堀氏とのかかわりであるが、堀氏は、もと三河国の門徒衆で、斎藤道三に任えて

出世し、豊臣秀吉の時、上杉家を会津に移した後の越後一国の支配をまかされたのに由来する。堀秀治が越後に入る時、その後見人となったのが堀直政で、その次男直寄が坂戸城を与えられたが、この坂戸城が前記の塩沢町長崎（旧長崎村）の北五キロほどのところにある。そして、この直寄が村上に転封された後、その次男直時に遺言して与えたのが村松藩三万石であって、藩末まで続いた村松の堀氏である。とすれば、塩沢在の長崎氏が坂戸城から村上を経て村松に至ったとも考えられる。

さらに、また、鎌倉滅亡の際に難を逃がれた長崎一族の誰れかが伊勢あるいは三河あたりに隠れ住んでいて、それが戦国争乱の時に堀氏に従って復興し、以来堀氏に臣従してきたのかも知れない。このあたりの史実を解明する鍵は、長崎村に行って見れば案外簡単に見付かるようにも思われる。

真人の念入りな推測を、本来ならば、新潟に住む私が確かめるべきだが、まだその時を得ていない。忙しくて、といえば言訳がましいが、楽しみをそっとして置きたい気持ちでもある。

ここまで筆を進めて来た時、わが家の郵便受がコト

リと音を立てた。ちょうど骨休みの頃合と郵便を取りに出て見た。例によって、ダイレクトメールの数通に混じって、見慣れた真人の字がある。珍しく「長崎明様」とある。これは何かあるぞと、そこは兄弟の直感。開封する間ももどかしく、さっと眼を通して私も身振るいした。例の伊豆の韮山町大字長崎を訪ね、こういうことには冷静な真人自身が身振るいする事実を発見したというのです。

伊豆、韮山町のナガサキ

○矢部

ほほう、それは面白そうな話だね。やっぱり地名を追って見ると、いろんな発見がありそうだね。で、その身振るいとは何事なんだね。その手紙を読んで聞かせてくれないか。

○長崎

私信の公表こそプライバシー侵犯になるのだけど、そっくり、そのまま、読み上げて見ましょう。真人の住所町田市からの手紙で、日付は十一月三日。

前略

十一月一日の日曜日、友人と伊豆に紅葉狩りのドライブをした帰路、僅かな時間でしたが韮山町の「長崎」という部落を訪ねて見ました。私は前々から、この「長崎」こそ、北条氏代々の御内人で鎌倉末期には内管領として実権を握るに至った長崎一族の出身地と目して、何時の日にか、それを確認する機会を得たいと思っていました。

現韮山町大字長崎は、北条時政の墓から三キロほど離れた所、国道一三六号線（下田街道）から五〇〇メートルほど東へ入った田園の中にあり、見たところ戸数一〇〇戸ばかりの小さな集落でしたが、この位置関係から見て、ここが北条御内人長崎一族の出身地であることは、ほぼ確実といってよいでしょう。

ちなみに内管領というのは、史書の説明によると、鎌倉中期以降、得宗専制といわれ、北条嫡流家の専制が強まった時代、一般の御家人と対抗する勢力として御内人と呼ばれる被官の一群が力を得て来た。これは、もと伊豆の北条本領の名主層の出身者や、北条が後に諸国に獲得した所領の出身者で北条に被官した者など、本来は北条氏の私的な家令職にある者であるが、その最上位の者は「内管領」と呼ばれ、

得宗専制下で幕政の中枢に参画するに至った。鎌倉初期の御家人の合議制と対立し、その内紛が、遂に鎌倉幕府滅亡の原因となったという。

残念ながら、当日、日曜日でしたので、長崎部落の郷土史について役場を訪ねることはできなかったのですが、韮山町郷土資料館に立寄り「韮山」という小冊子を買って来ました。それによると、慶長二年の長崎村の検地帳が残っていて、三人の豪農を中心に三六町歩余の田畑が記録されており、歴史のある裕福な農村だったと察せられます。

それはそれまでの話ですが、今回の訪問での大発見は、長崎村の「崎」が実は「﨑」であったということです。部落のほぼ中心に、恐らく合併前の旧村役場とおぼしき古びた建物があり、その看板に「長﨑区老人会」、「長﨑区消防団」など、紛れもなく「﨑」の字が書かれていたのです。地図にも案内書にも「長崎」と書かれていたのが、ここではハッキリと「長﨑」と書かれていたのです。

この「﨑」の字を眼にした時、私は身ぶるいを覚えました。もし、わが家の長崎の「﨑」に特別な意味があるとすれば、この「﨑」の字こそは極めて重要な歴史の証書となるかも知れない。わが家の先祖は、「崎」ではない「﨑」と書くことによって一族の出身を明らかにしようとしたのかも知れません。

話は今日のところそこまでですが、先日頂いた「新潟の教育情報」の兄さんの物語の後日譚（たん）となるかと思い、筆を執った次第です。いつの日か、また機会を得て、「﨑」の字を追って見たいものです。

村松町の長﨑家

○竹中

まあ、それでは「﨑」の字を追えってことになるわけですね。そうすると、村松の長﨑さんのお家もお先祖様が何処からおいでになったか、だんだん分かってきそうですね。

○長﨑

「﨑」の字を目印にわが家のルーツを探る。それなりの方法に違いないのですが、「﨑」と書くか、「崎」と書くかにそれほどの意味があるのか。「﨑」の方が少しおもおもしいので、たまたま、そう書いたにすぎない。誰れかがそう書いたら、われもわれもと真似をした。韮山町の「長﨑区老人会」も看板

を書く人の好みでそうなったにすぎないのかも知れません。

「わが家のルーツを求めて﨑の字を追う」のは、一つのロマンかも知れないが、あんまり深追いしないで夢のままにしておく方がロマンらしい気もします。

○竹中

それにしても、長﨑さんとこのご兄弟はご熱心なんですね。

○長﨑

それはですね、別に家族制度礼讃というわけではないのです。むしろ、強固な家父長制度がわが国の歴史を誤らせたとさえ思います。しかし、戦前、戦中、戦後を通じて、経済的にも精神的にも苦しかった時代に、助け合い、慰め合い、何とか切抜けてこれたのも家族あってのことという気もします。家父長中心の家族主義ではなく、一人一人の家族お互いを人間として認めあったうえでの、生活の最小単位としての家族としてなら、家を大切にすることも必要と考えますが、いかがでしょうか。ただし、ベタベタと家にばかり張り付くマイホーム主義ともまた違うのですが……。

○木本

今日の核家族化の下では、さっき長﨑先生がお話になったような「祖父母から孫へ」の伝承ができなくなっている。年寄りと若者が別々に家を持つ傾向は今後とも一般化するだろうが、若者夫婦は家一軒持つために共稼ぎして、その子どもは誰が面倒見るのか。

○長﨑

確かにわが家でもその問題がある。現に村松には年寄り夫婦二人きり。新潟のわれわれもそろそろ老境に入るが、やはり二人きり。子ども達もそれぞれに「住み家」を求めて、はなればなれになっている。

村松にはそういう家が多い。私たちの両親がいなくなったら、村松町から長﨑姓がなくなってしまうかも知れない。そんなことを考えながら、長﨑家のルーツを求めているわけです。真人もそういう気持ちかどうか、それは話合ったわけではないので判りませんが……。

今、現在、村松に長﨑という家がある。そして、そこから私たちが育ってきた。これは厳然たる事実であるわけです。私がその家の七代目になることも嘘ではなさそうです。

○小倉
七代目がはっきりしているというのは、それなりに古い家柄といえますね。初代は何年くらい前になるのでしょう。
○長﨑
私の家の家系図によると、初代は藤原武元長﨑陸八といい、一八一一年（文化八年）に歿したとある。その父は佐藤権太夫というが、長﨑間兵衛なる人の養子だった。陸八は佐藤姓を継がないで、祖父の長﨑姓を名乗ったわけである。権太夫は養子なのになぜ長﨑を名乗らなかったのか。それが陸八の代に再び長﨑を名乗り、初代となったのか、詳かでない。
二代目は藤原武一長﨑陸蔵（後に陸八と改名）、三代目は武臣、倉蔵（後に陸蔵と改名）、四代目は武存、倉蔵（後に陸蔵と改名）、この武存の代に明治維新を迎えた。四代目までは藤原武ナニの長﨑ナニ蔵というように武士らしい呼び名を持っていたが、どういうわけか、実子に恵まれたのは二代目だけで、五代目信吉（私の祖父）も含めて、ずっと養子で家系をつないできている。二代目の陸蔵だけ四男二女の子沢山だったが、長男、次男、四男を養子に出して、三男をあととりにしている。祖父信吉は、吉田家の長男に生まれたのに、長﨑家の養子になっている。それだけに長男が生まれた時、余程嬉しかったに違いない。代々受け継がれてきた武ナニナニの一字を採って「武（たけし）」と名付けた。これが村松にいる私の父である。父八四才、母八三才で、今なお矍鑠（かくしゃく）、父は時折バイクを乗り回して母を心配させてる、といったところです。
○竹中
ちょっと待ってください。昔は、武士の家は子どもができないと、お家断絶だったのではないですか。
○長﨑
私も良く知らないが、血統を重んじる封建制はなやかな時代は、確かにそうだったのでしょうが、徳川も末期、封建制がかなり緩んでくると、血統よりも家柄（家系）の継承を重視するようになったのではないか。
○木本
明治維新の時の士族は、そういう家柄をご破算にされて、ずいぶん大変だったんじゃないですか。
○長﨑
そのことについては、私も祖父から聞いたことがあります。私は、東京の大学に遊学するために、台

湾の両親のもとを離れ、単身戦時下の東京暮らしをしていたのですが、夏・冬の休暇には良く村松に帰省しました。そういう時に祖父はぽつりぽつりといろいろなことを聞かせてくれました。

村松藩は戊辰の役に長岡藩、会津藩と共にいわゆる官軍を敵に回して戦い、遂に落城したのですが、その戦火を受けて、わが家の裏にあった柿の木が焼けただれたという。その柿の木は当時も良く実を稔らせていたが、いつのまにか切り倒されてしまった。

日の出の勢いの明治政府に抗して破れた村松藩の、そのまた最下級の武士（足軽ていどか）の落ち行く先は、ただ貧乏あるのみ。祖母の話によれば、家の縁先に駄菓子を並べて売っていたとのことです。廃藩置県に際して士族に与えられた公債をもとにして、武存も発起人の一人となって、第六四銀行を設立したりしたが、これもうまくいかなかったのであろう。僅かにその一株券が今もわが家のどこかに残っているはず、とのことだが、私はまだ見たことがない。

この武存は、わが家の菩提寺、安養寺の本堂建立の時、その采配を取ったが、不運にも落ちてきた梁の下敷きになって、重傷を負い、戸板で新潟の病院へ運ばれる途中、朗々と詩を吟じながら落命した。その妻も夫におとらず剛毅な人柄で、村松城落城の時、燃えさかる藩の倉庫から米俵二俵を両肩に担いで持出し、これが当分の間、近隣、一族の口をうるおすことになったという話です。

そういうことがあってかどうか、足軽ていどの下級武士の出にすぎないのに、長崎家代々の位牌（いはい）は、安養寺本堂奥の院の比較的高いところに祀られている。それらのいわく因縁を住職さんにお聞きしたいと思っていたが、高齢で先年亡くなられて世代が変わってしまった。

廃藩後の村松町は、さぞかし寂れる一方だったでしょうが、やがて大陸向けの軍隊を訓練する村松連隊が設置され、兵隊が落とす金でいささかの繁栄の夢をむさぼるのだが、維新直後、気位ばかり高くて金もうけができず、生きるための手職も持たない下級武士は、役場の吏員か、教員か、警察官か、軍人か、はたまた郷里を捨てて外地に移住する以外に、食う道を持たなかったわけです。わが長崎家も結局のところそれらの中の何れかを選ぶ以外にありませんでした。

（ながさき　あきら＝にいがた県民教育研究所会長）